



クイーン・エリザベスを考える：
2013年秋のアドリア海・黒海クルーズより

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15369

クイーン・エリザベスを考える

～ 2013 年秋のアドリア海・黒海クルーズより

大阪府立大学教授 堀江珠喜



ベニス停泊中の QE（2013年9月22日）

クイーン・エリザベスについては2011年4月、クイーン・メリー2ワールドクルーズでチビタベッキアに寄港時、やはり停泊中のQE 有料船内見学ツアーに参加し、クイーン・ヴィクトリアと同じヴィスタクラスではあるが、よりチープな印象を受けていた。また2012年QV パナマ運河クルーズのグリルで席が近かった北欧のカップルが、その半年後に QE に乗船しそのサービスの悪さについてメールをくれていたし、ネットでも QE での不愉快な体験記は検索できる。さらにキューナードのサービス低下については2012～3年のQM2カリブ海クルーズで認識していた。それでも今回、QE のアドリア海・黒海クルーズ参加を決めたのは、黒海に入る旅程が珍しかったためと、ヴィスタクラスでは好みの最後尾角部屋が予約できたこと、そして不評ではあれ一度くらい QE に乗ってみなければキューナードについて語る資格がないと思われたからである。この船については既に女性ユーザーの視点で、2013年10月26日の本学会にて講演さ

せていただいたが時間の制約もあり、報告としては不十分であったと考える。そこで、ここではトピックスを増やし改めて QE について論じることにする。（なお、レストランについては別稿で QM2やQV と比較しながらまとめた。QV には劣るものの、クイーンズ・グリルにおいて人的サービスは満足できるものであった。）



最後尾角部屋のバルコニーはL字型で広い

《キャビン》

キャビンは4188、デッキ4のポートサイド最後尾角部屋でカテゴリーはQ5である。クイーンズ・グリルクラスなのでバトラーがつく。中国系でもないのにジャッキー・チェンにそっくりなチリ人で、もともとはハイアット・ホテルに勤務していたらしく、これまでの我々の担当バトラーのなかでもその能力はトップクラスと思われた。そのためか、フォトショップで売られるQEの思い出DVDにも彼は登場している。

2012〜3年のQM2と同様、ベッドにカバーがない。聞けば、QEでは就航時からないとのことであった。つまりは初めか



らコストカット船だっ
たのである。またQM2やQVでは、その日のランチとディナーのメニューが黒いホルダーに挟んで装飾品のように部屋のカウンターに置かれるのだが、QEではやはり就航時からそのようなホルダーは用意されず、なんとペラペラのA4用紙表裏に印刷されたものが届けられたのには驚いた。高級感の演出不足である。(現英国女王陛下の名前を頂いた船なのに、と思うとちょっと面白い。)

さらに2012〜13年のQM2のように名前入りレターセットの申し込み用紙が一枚しかない。これについてバトラーはこの用紙に2人、それぞれの希望のレターヘッドを指示して書けば、2セット作成してくれると教えてくれた。また乗船3日めに雑談の機会があったので、夜、掛け布団の上に置かれるチョコレートが約1年前からずいぶん小さくなったと不満を述べると、多い目に届けてくれるようになった。バトラーとのコミュニケ



三晩めにバトラーが置いてくれたチョコレート特別サービス

ーションの重要性を実感した。

このように人のサービスは担当者次第なので、どの船が良い、悪いとは言えないのだが、室内については、QVの角部屋と同様にデッドスペースが多く、改良されるどころか、事態はひどくなっていった。まず、部屋の入り口に呼び鈴がない。QM2やQVのクイーンズ・グリル・スイートでは必ず設置されているのである。またベッドサイドのテーブルに電話機がない。3メートルほど離れた机の上に電話があるので、モーニングコールが鳴ると、起き上がってそこまで行かなければならない。その不便さを解消するべく、この電話には3メートルほどの長いコードがついているが、ベッドサイドテーブルには固定された照明器具があり、電話を置くのに十分なスペースはない。無理に置けば不安定で、船が揺れれば床に落ちるかもしれない。それではモーニングコールが受けられまい。

ソファもこれまでに比べて小さい。ソファベッドを置くのに十分なスペースがあるにもかかわらず、である。するとこの部屋では客が3人しか呼



座れば引き出しと浴室のドアが開かない

べない。つまり2カップルを招くことはできないのだ。QVの角部屋に比べ、収納場所が増えておらず、QM2のようなウォーキングクローゼット

もない。デッドスペースを活用したなら、もっと快適な部屋になるだろうに、設計者の神経を疑う。QVではバー・カウンターの水道部分が不要だったが、これについては改善されたというより「安上がり」を目指してQEの内装がなされたように思われる。

バスルームには洗面ボールが2つ並べて設置され、バスタブとは別にシャワーブースがある。陸の高級ホテルで部屋のスペースがとても広いなら、このくらいのバスルームの設備は当たり前だが、QEのQ5レベルのキャビンではQM2のQ6やQ5カテゴリーのように洗面ボールが一つでバスタブにシャワーがついていればいい。そのかわり浴室前のクローゼットや化粧台部分をもっとゆつたりと設けて欲しかった。なにしろ化粧をするべく椅子

に座ると、引き出しは（椅子が邪魔で）開かないし、その間、浴室のドアも使えない状態になるのだ。もはや素人以下の内装設計である。

さらに洗面ボールの脇に戸棚とグラスホルダーと石鹸置きがあるのだが、その石鹸置きの皿部分がひとつ壊れたままになっている。そこで石鹸は洗面カウンターの上に直に置かなくてはならなかった。（ちなみに一つ上のカテゴリーQ4ペントハウスでは、もともと石鹸皿がなくて初めからカウンターに直置きという「エレガンス」とはほど遠い仕様になっていた。このようにチェックし続けると、あまりに欠点が多く、腹立たしさを乗り越えて愉快にすら思えてくるほどである。）

もちろん安作りのほうが利用しやすいものもある。たとえばバルコニーのデッキチェアである。



バルコニーの椅子

QM2は木製で布が張られ高級感はあるが、重たくて使い辛い。潮風で布の手触りが不快でもある。QVでは金属

のパイプと樹脂加工した布で、安っぽいクルーズ船でよく見かけるデッキチェアだった。使い勝手がとてもいいというわけではない。だがQEでは、安っぽい素材ではあるが、デッキチェアが腰を下ろす部分と足を載せる部分に分けられ、それぞれが単品になっているので移動させやすく、とりわけバルコニーから長時間、景色を眺めたいような今回のクルーズには有り難かった。

《パブリックスペース》

高級ホテルでは廊下の幅が広く、そこを歩くだけで優雅な気分になれる。ひょっとしたらそのような通路を取り入れようとしたのだろうか、QVとQEではクイーンズ・ルームを見下ろすようなバルコニー風の張り出し部分があり、その後ろがシアターに行く通路になっている。だがヴィスタクラスでは客室前の廊下は興ざめする。QM2のデッキ9は全室クイーンズ・グリル・スイートなので、廊下も比較的ゆったりしていて、そこを歩く客層

はいい。少なくともドレスコード違反者は見かけない。また忙しく働くバトラーやそのアシスタントも礼儀正しい。だが、ヴィスタクラスでは同じデッキに3クラスのキャビンが設けられるので、騒々しいこともある。なにより廊下が狭い。またその狭い廊下に掃除道具が一日中置かれている。もともとこれらの収納スペースが作られていないのだが、非日常的フォーマルナイトにブラックタイとイヴニングドレスで歩いていると、この極めて日常生活臭の強いワゴンや掃除機、バケツと遭遇するのである。



掃除道具などが置かれた狭い廊下のコーナー

まあ客室前の廊下は記念撮影スポットではないから、足早に立ち去ればそれでいいでしょう。（長くはないが、収納スペースを作らなかったのには、



QEのレリーフ

設計上それなりのしかるべき理由があったのであろう。）だが、この船のなかでも、もっとも象徴的な場所、QEのレリーフが飾られた三階吹き抜けの中央階段、フォーマルナイトには写真屋が陣取る踊り場へ、航海日の昼間に行けば、なんと麻雀牌

の音が響いてくる。もしかしたら、ここはQEではなくてアジアのカジノ船スターバードだったかと錯覚しそうだ。それもそのはず、パブリックスペースのテーブルで中国人もしくは台湾人客たちが、麻雀を楽しんでいるのである。



麻雀を楽しむ乗客

しかし「中国人はマナーが悪い」などと批判するのはお門違いである。彼等はキューナードが用意した麻雀牌を使い、指定された場所で遊んでいるに過ぎないのだから。英国はつい近年まで香港に

総督府を置き、中国文化には理解があるというアピールなのだろうか。中国文化だったら不可解な料理を出す別料金レストラン、ベランダの代わりに中国飯店でも営業させればいい。英国船において、このようなリトル・ホンコンをパブリックスペースに設けるのは、迷惑きわまりない。(そのうえ麻雀の機会を提供しなければ、彼等のうち何人かはカジノへ行き、お金を使ってくれるかもしれないのである。)サービス業のクルーズ船スタッフが誰一人、このようなことに気がつかないのは不思議である。中国でも一流ホテルのロビーで、宿泊客が麻雀に興じているのを見たことがあるだろうか。(宴会場でパーティ開始前に麻雀タイムがあったりはするが。)つまりこの事態は、クルーズ業界において「プロ」が激減していることの証なのではあるまいか。

なお、この場所から少し船尾寄りのメイン通路では、壁に取り付けられた照明器具のガラス部分が割れたままになっていた。船内に部品の在庫がないなら、イタリア航海中に交換部品を取り寄せて修理すべきであろうに。

《シアター》

QV も QE もシアターにボックス席があるというのが、この2船の自慢である。だが陸のオペラ劇場のボックス席もサイドからでは舞台が見にくいのに、さらにこのシアターでは落下防止のための透明板がつけられ、そのカーブのため観賞しづらいという難点がある。人気のショーで座席の確保が難しいときに、ボックス席は予約できるという利点があるが、それほどまでにしたいような出し物に乏しいのも事実である。

実際、最近のクルーズ、特にキュナードで面白かったショーは2012年春のQV パナマ・クルーズでのクルー(乗組員)・ショーくらいで、今回のQEにおいては「迫力あるダンスが凄い」とクイーンズ・ルームのダンスホストに勧められて『ラ・ダンツァ』を見に行っただものの、幕が上がるや否や、私は睡魔と戦う小一時間であり、連れの田中博はショーの間中、爆睡状態であった。構成も、演出も、衣装もひどく、魅力的な踊りを見せるダ

ンサーが一人もいない。(ホーランドアメリカでは、一人くらい目立って巧いのが混じっているのに。)あれなら、クイーンズ・ルームで、ちょっと上手な社交ダンスのカップルを眺めていたほうが、よほどいいくらいだ。

この船のエンターテインメント・ディレクター女史は元クルーズのショーダンサーなので現場には強いかもしれないが、クリエイティビティとマネージメント能力には欠けるようだ。なによりクルーズ生活が長くて大都会の上質なショーを観劇して勉強する機会がなかったのではあるまいか。昨今はパリのリドのスペクタクルやクレージーホースのショーですら、かつてに比べれば安作りでレベルの低下が顕著なので、クルーズ船では多くを望むべきではないのかもしれないが。しかしそれなら英国船らしく、観客が喜ぼうが退屈しようが RADA(ロイヤル・アカデミー・オブ・ドラマティック・アート)のシェイクスピア劇のほうが適切だろう。1時間によくまとめてあるし、キュナードの乗客のプライドにかけて、「シェイクスピアが退屈」などとは口が裂けても言えまい。近頃、QE にはドイツ人客が増えているのもちょうどいい。RADA のシェイクスピアを積極的に観るのは英国人よりむしろドイツ人だと以前に劇団員から聞いたことがある。RADA がQM2 においてしか公演しないのは、残念なことだ。

《テーマボールとドレスコード》

キュナードに乗る楽しみのひとつは「テーマボール」だが、今回のQE では全くつまらなかった。ひとつには、誰がどのような経緯で決めたかわからないが、「テーマ」がクルーズに合っていなかったことである。5日めに「ロンドンボール」が開かれたが、その前日はギリシャで翌日はトルコ寄港だった。つまり「ロンドン」とは縁もゆかりもない場所で(もちろん船籍もロンドンではないし)、こんなテーマではいくら英国人客が多くても盛り上がるはずがないのだ。ワールドクルーズなどで寄港地に合わせたボールが企画されることについては以前に記した。寄港地の土産物店で小物やときには衣装を購入して客たちは楽しむのである。

従って、このクルーズでも「ロンドン」の替わりに「ターキッシュ・ナイト」や「グreek・ナイト」のほうが好ましかったし、「アラビアン・ナイト」ならもっと楽しめたと思われる。(素人でもこのくらい考えるのに、エンターテインメント担当者のセンスを疑う。)



ロンドンボールの
英国人カップル

なにより「ロンドン」では何を着たら良いのか見当がつかない。準備のため、これまでのクルーズでは出発2〜3週間前に「プレヴォヤージュ・ドキュメンテーション」が送られ、その中のドレスコードの予定表を見て、不明な点を日本の代理店に問い合わせたのである。ところが今回、キューナード・ジャパン・オフィス（カーニバル・ジャパン）はこの資料の発送を取りやめた。それなら、その内容をなんらかの手段で参加者に連絡しなければならないとは、キューナード・ジャパンは考えないのだ。出発2週間前になっても何の音沙汰もないので、JTBのロイヤルロードから問い合わせたところ、数日してやっとドレスコードとテーマについての情報は入手できた。だが、キューナードボールが通常のブラック&ホワイトボールなのか否かをはじめ、ロンドン、エリザベス朝、スターライトなど、今回初めて耳にするテーマについて、また尋ねることになる。結局、回答を得たのは出発まで一週間を切った時期であった。これでドレスコードを守れとは、あまりにもひどい。これらのテーマボールはすべてフォーマルナイトに設定されているのだ。

さて「ロンドン」はユニオンジャックを身につけるとのことだったが、ドレスの色に合わないし日本人が英国旗をつけるのも変な気がする。わざわざユニオンジャックを買いに行くのも面倒だし、まあ、そのようなボールを開くのだから船内で入手できるだろうと思ったが、販売はされなかった。

(他のキューナード船ではマスカレードで仮面、海賊ナイトで帽子やバンダナ、眼帯セットを売って

いたこともあるのに、QEはとことん気の利かないスタッフの集まりのようだ。)このテーマナイトで、ユニオンジャックをつけたのは英国人カップル組だけだった。

いっぽう7日めの「エリザベス朝」では、どのような格好をすればよいのか想像はできるが、短期間での用意は無理である。2012年のQVではヴィクトリア朝のテーマボールがあり、このほうがエリザベス朝よりは容易ではあったにもかかわらず、誰もテーマに合わせた服装をしていなかった。ましてやシェイクスピアの時代風の衣装など、大変すぎる。結局、扮装をしていたのは「盛り下げ」得意のエンターテインメントスタッフだけだった。それでも、特別にルネッサンス風音楽が流れ、映画のなかでエリザベス一世が踊るようなダンスを教えてくれれば良いのだが、そのような工夫もない。「エリザベス朝」とのテーマのもとで、タンゴやチャチャチャを踊るアホらしさを本学会員の皆様にはわかっていただきたい。



盛り下がったエリザベス朝ボール

それならせめて、現代の社交ダンスに適した音楽を流してくれれば良いのだが、今回のクイーンズ・ルーム・オーケストラと歌手は、キューナードとは思えないほどレベルが低かった。ラテンバンドも、これまでのキューナードならやはり社交ダンスに向く曲をクイーンズ・ルームでは演奏するのに、このQEではディスコ音楽ばかりで、まったくエンターテインメント・ディレクターの無能さが伺えた。QM2ならディレクターにあてた手紙をグリルラウンジのコンシェルジュに渡せば、それなりに対応・努力してくれたが、今回のミュージシャンやディレクターではそれも無理と思い、投書はやめた。

QM 2やQVのクイーンズ・ルームには社交ダンス好きの(キューナード乗船日数記録保持者を含めた)リピーター女性単独客が多いが、今回のQEではほとんど見かけなかった。(目下のところキューナード乗船最多日数記録を持つ社交ダンス好きのバーンスタイン夫人だって、こんなQEなら敬遠するだろう。我々が彼女と会ったのはQVのクイーンズ・ルームだったから、決してヴィスタクラスがお嫌いなのではないのだが。)それでダンスホストたちは女性客を誘えず、よく私の相手をしてくれた。

(本来は、カップル客の女性にダンスを申し込むのを連れの男性客に気兼ねして遠慮するものだが、田中博の愛想が良いのでホストたちは私と踊りたがった。それほど彼等は暇、そしてそれはQEは社交ダンス好きの女性客から嫌われている証拠ではあるまいか。)

なにしろ今回のクイーンズ・ルーム・オーケストラはリクエストを求めたくせに、その曲を演奏しないし、ダンスに合うテンポがわかっていないので踊りにくい。タンゴのレパトリーもほとんどない。バンドの休憩中に使われるCDのほうがよほど良かった。ただしこの選曲もダンスを知らない者に任されているらしく、疲れた中高年客が多いのにサンバやウィンナワルツなどを流すのでフロアが空っぽになるのだ。

さて話は前後するが、最初のフォーマルナイトは3日めで、キューナードの習わしどおり衣装を白と黒でまとめるのである。ところが、どこ国でもテーマボールの衣装について連絡を受けていない客がいるのか、あるいは知っていてわざと目立とうとしているのか、意外にこの夜は赤のイヴニングドレスが多かった。船長主催のカクテルパーティがあり一緒に写真を撮られるときのことを考えてドレス選びをしているのかもしれないが、皆がブラック&ホワイトという限られた条件のもとで競い合わない、イヴェントとしては面白くない。もちろん男性は普通にタキシードを着ていればいいのだから楽なものである。

9日めは「スターライトボール」で、何か光るものを身につけろとのこと。私は、こんなテーマでないと出番がないような衣装をたまたま持っていたので、それを着たが、考えてみればこれもナ

ンセンスなテーマであった。なぜなら女性は夜のパーティに出るとき、必ず輝くアクセサリをつけているものだ。このボールでは、ラメ入りの蝶ネクタイをしている男性もいたが、それではあまり目立たない。とはいえ堅気の紳士がラメ入りのジャケットなど着るわけがあるまい。

キューナードは2013年4~5月にドレスコードを変更した。それまでのセミフォーマルとエレガント・カジュアルがインフォーマルとなったのだ。これにはキューナード・ファンからの反発の声が多かったようだが、今回のクルーズでは英国人客が多かったためか(1998人中884人)、服装の乱れは感じられなかった。ドレスコードを守らないことでは悪評高いオーストラリア人が112名もいたが、オセアニア・クルーズとは異なり、地中海まで出かけてくる客層の民度は高いと思われた。少なくともクイーンズ・グリルでは顔を顰めたくないような事態は起こらなかった。だが、クイーンズ・ルームでは、6日めの夜11時半近く、履き慣れないハイヒールが辛かったのか、こともあろうに、裸足でディスコを踊る白人女性客が現れたのである。それを制止するべきエンターテインメントスタッフが一緒になって踊り続け、良識ある客たちがフロアから去ってもお構いなしであった。



裸足で踊る女性客(左)

キューナードの航海で、これまでどんなに服装が乱れていても、裸足の客をダンスフロアで見たことは無い。(夜遅くに、エレベーターでハイヒールを手にもぶら下げた女性なら見かけたことがある。それも格好の良いものではないが、エレベーターは昼間、スパやプールに行く客がバスローブ姿で利用してもいいことになっているようなので、それなら、まあ仕方がないかもしれない。ちなみに一流ホテルで部屋からバスローブを着用して廊下

を歩いて構わないのは、私の知る限りカリフォルニアだけだ。)

《レッスン》

キューナードでの楽しみのひとつに、他社の船よりはましな「レッスン」がある。たとえば社交ダンス。ホーランドアメリカだと、社交ダンスを知らないシアターのダンサーが適当に教えるだけだが、キューナードではクルーズ船のフロアにぎっしりと集まった大勢の客を前に、プロの教師がカップルで担当する。もちろん教え方の上手下手はあるし、なによりこのプロがフロアで披露するダンスが見ていられないほどお粗末であることも多いが、それでもプロはプロである。もっとも、近頃はあまりに混み合っているの、よほど暇でなければ参加しない。私が『月刊ダンスビュー』に寄稿するためのネタ拾いに見学するくらいである。

社交ダンスのレッスンでは、カップルで踊らねばならない。一人で参加しても相手は見つかるが、どうしてもなく物分りの悪い方と組んでストレスを溜めることになるかもしれない。その点、今回、女性客の間で好評だったのが、「ベリーダンス」である。キューナードでベリーダンスのレッスンを受けたのは初めてだが、たまたま社交ダンスの女性教師が担当できたための講座かもしれない。スタイルの良い教師はちゃんと臍を出し、腹筋を見せてくれるが、大部分の中老年女性客は三段腹を着衣で隠す醜態な状態だ。それでも女性ばかりの気楽さで、笑いが絶えず、終わってからも、その後どこかで顔を合わせたときにはこのレッスンの話で盛り上がった。



ベリーダンスのクラス

女性はどこでも「おしゃべり」が好きだ。社交ダンスは夫婦で参加することが多く、他の女性と話をすることはまずないが、「ベリーダンス」なら女性だけの参加なので、おしゃべり仲間が見つかりやすい。さらに中高年に多い腰痛にも効果があるのだ。自分が立っているスペースで踊れるので、広い場所でなくとも多人数が同時に受講可能、つまり女性客が多く狭いクルーズ船では最適のレッスンであるといえよう。

それとは対照的なのが「フェンシング」だ。キューナードの英国らしさを表すのがこのレッスンで、これまでのクルーズで練習風景を偶然に見たことはあったが、登録や練習の時間帯が食事にかかるなどしたので受ける機会を逃していた。しかもスペースが必要だし、体格によってサイズの異なる胴衣や面、手袋の貸し出しの都合から、受講人数が10名や12名といったぐあいに制限される。ベリーダンスに比べ、はるかに贅沢なレッスンなのだ。(従ってキューナードのコスト削減が実施される現代、いつまでフェンシングが船上で習えるかわからない。他社のクルーズ船では絶対に経験できないので、チャンスがあればキューナードで受けてみることをお勧めする。なお、キューナードでも、すべてのクルーズで実施されているわけではないようだ。)



フェンシングのクラス

この航海では、出来るだけ多くの客に機会を与えるべく、クルーズの半ばと後わり近くにそれぞれ受講者を募り、計2コースが提供された。1コースで約1時間のレッスンが2回ある。初心者入門というよりは、超初心者体験コースである。初回の登録は5日めの航海日、朝8時45分から始まり引き続き9時からレッスンが行われた。この

日の朝食はグリルやブリタニアレストランでは8時から9時半なので、無理ではないが慌ただしい。しかも登録は希望者が多ければおそらく先着順になるだろうから、受講を熱望するなら朝食はルームサービスかブッフェにしたほうがいいだろう。

2回めの登録は9日めの午後5時からであった。オデッサを3時過ぎに出港したので登録するのはいいが、それに続くレッスンを受けられるのはブリタニアで1回めの食事をしない者だけである。というのもこの日はフォーマルナイトなので午後6時以降はドレスアップしなければならないのだが、レッスン終了は6時なので、そのまさに6時に始まるブリタニア1回めの客には、着替える時間がないのだ。

そのためか登録に現れたのは9名だった。女性を私を入れて2名、私以外は全員が白人、そのうちほとんどが英国人だ。受講にあたっては体調や精神状態に異常がないとの自己申告と、インストラクターの指示に従い、怪我については自己責任である旨に同意の用紙にサインさせられた。さすがは訴訟大国で操業する船会社である。

この日はまず「かつての紳士が学んだのはダンスとフェンシング」などの説明を聞いた。ちょうどレッスン場のクイーンズ・ルームは、夜はボールが開かれるので、この話は興味深かった。その直後の、向かい合った相手が前進するのと同時にこちらが後退する条件反射的練習には、確かに「ダンス」的素養があると楽だ。レッスンの後半は面を付け、剣を持ってポーズ。姿勢をチェックされて、次は前後に動いて突く動きを練習。6時終了のはずが10分余り延長された。



長身のインストラクターと筆者

これではやはりブリタニアの1回めには間に合わない。

第2回めのレッスンは下船前日の航海日の朝9時から10時までに行われた。受講者が決定しているのでデイリープログラムには記載されず、そのためか2名欠席した。この日は面と胴衣をつけ、

向かい合って打ち込みと防御の練習。剣と剣の当たる音がするとフェンシングの雰囲気が高まる。後半は練習試合となった。日本の剣道と違って前後にしか動けないし、剣で胸を突く以外に攻撃方法はない。つまり手足が長いと圧倒的に有利な競技なのだ。そのためか、試合相手は身長で決められたように思う。私の場合は背が低く小太りの中年英国紳士と対戦し、それぞれが1ポイントずつ取り最後は引き分けとなった。(もちろん競技用の機械をつかえば「引き分け」ではなくどちらかの得点となるはずだが、ここではインストラクターの目視判定によるのだ。)フェンシングでは剣を持つ手にグラブをはめる。素手のほうは試合直後に素早く握手ができるように手袋をはめないのだから、さすがは紳士の「スポーツ」だ。

QEとQVのクイーンズ・ルームは通行者の目にとまりやすいので、フェンシングのレッスン後、私は何人もの欧米人から声をかけられた。面や胴衣をつけていても私とわかったらしい。このように、紹介がなくても気楽に知らない者同士が声をかけて親しく話ができるのが、クルーズという共通の空間で同じ興味を持つ者の特権であろう。ベリーダンスであれフェンシングであれ、積極的に活動すれば、それだけ話題も増え、おしゃべり相手にも恵まれることになるのだ。

《イヴェント》

寄港地の多いクルーズでは、船内イヴェントも限られる。その数少ないイヴェントくらい盛り上げて欲しいものだが、今回のエンターテインメントスタッフは絶望的であった。3例を挙げよう。スターライト・ボールの夜にクイーンズ・ルームでは10時半からダンスコンテストが行われたが、その出場申し込み時間が当夜の9時半、なんとグリルのプラチナ&ダイヤモンドリピーター客の場合、ディナーと重なったのである。(この夜、これらリピーター客は船長主催のカクテルパーティに招待され、夕食が遅くなったのだ。)他船ではコンテストの前日か2日前に時間的余裕をもって登録させるのに、である。

審査員が3名おり、観客のうち30名ほどが投

票用紙を渡されていたが、どうせクルーズの余興競技はいい加減なものである。(今回は子供、高齢者、身障者の参加がなかったが、あれば通常、彼等の誰かが優勝する。) 点数配分やら採点基準、さらには得点が不明瞭で、くだんのショーダンサー上がりのエンターテインメント・ディレクターが自分の好みで選んだように思えた。さらに1位の発表のときにスタッフが背番号「3」番というべきところ「1」番と間違え、1番のカップルには気の毒であった。(このスタッフは学芸会以下のレベルでしか働くべきではない。)

さて最終航海日に乗客による芸能大会を開く船は多い。キューナードにおいても同様だ。通常、大会開催のお知らせは数日前からデイリープログラムに載り、そして出場申し込みは大会の2日くらい前までで、前日や当日の朝はリハーサルを行う。芸能大会がクルーズの目当てでトランペットやクラリネットを持って来た乗客もかつてはいた。ところが今回は、お知らせが前もって載らない。最終航海日の前夜に配られるデイリープログラムに、やっと「ゲスト・タレントショー」の登録とリハーサルが午前10時半から、ショーが2時からである旨が載った。それで2時前にクイーンズ・ルームに行き他の観客と座っていると、2時にエンターテインメントスタッフがやって来て「申し込みが誰もいなかったので中止」という。それなら船内放送でも連絡があれば足を運ばなくて済むのに！と客たちから不満の声。だいいち、芸能大会をするならもっと早く広報してくれればベリダンス仲間を募って、インストラクターにも相談して楽しいことができたかもしれないのにと、エンターテインメント部門の要領の悪さについて、英国人女性客と愚痴った。

思えば、これまで素人芸能大会に喜んで出るのはアメリカ客が多かった。だからホーランド・アメリカではそのような大会が面白い。キューナードにおいても同様で、アメリカ発着のクルーズでは成功するが、ワールドクルーズのドバイ〜サウサンプトンでは出場者が少なく10分で終わってしまった。つまり米人客の少ないQE 地中海クルーズでは、広報をより早くから熱心にするべきだったのだ。素人でもこのように分析できるのに、ま

ったくエンターテインメント・ディレクターのマネジメント能力は素人以下である。そもそも彼女は、現場上がりなので現場を理解していると思いい入っているせいか、ほとんどイベント現場に姿を現さないのだ。来ても、すぐに帰ってしまう。これでは客の動向や要望はわかるまい。

その彼女のいよいよ無能さが露呈したのは、この「そして誰も出なかった」芸能大会から2時間45分後の今回の船長のサイン入り航海図(チャート)1枚のオークションで、デッキ1のグランドロビーで行われた。ここはクリスマスキャロルにはいいが、競売には不向きである。だいいち、椅子にすわると、競売品がよく見えない。立つと他の客に迷惑である。エンターテインメント・ディレクターなら、そのくらいのことが察知できないのだろうか。

オークションにあたって、彼女はチャートの価格を100ドルから始めた。それはいいが彼女が50ドルずつ上げていき買い手を求めたのは、いかがなものか。このように一点しか品物がなくて時間が充分にあるとき、そしてなによりエンターテインメントとしてオークションを位置づけるならば、100ドルのあとは客に小刻みに値段をつり上げさせるように仕向けたほうが会場は盛り上がるのだ。

私はかつてQM2のワールドクルーズ第6区間の2枚組を350ドル、QVのパナマ運河クルーズ3枚組を360ドルで競り落としたことがあり、オークションは嫌いではない。だが今回は是非ともチャートを購入したいと思うほど楽しいクルーズではなかったし、船長も魅力的ではなかったので、単なる冷やかashiで参加し、350ドルまで値段をつり上げた。2012〜3年のQM2カリブ海クルーズではオークションのタイミングが良く1000ドルで落札されたが、今回は競りが盛り上がり、200ドル以降、ある白人男性客と私の一騎打ち状態となり、彼が1000ドルまで出すとはとても思えなかった。そこで彼が「400」というのを聞いた時、私は降りた。もし私が450ドルで買うはめになったら大変だ。

オークション直後、この男性にこうお祝いの言葉をかけた―「おめでとうございます。1000

ドルまでつり上がることもありますから、400ドルはラッキーな価格ですね。彼はたいそう喜んでいました。しかし、もし私がいなかったら、オークションは成り立たなかっただろう。いや、少しは競り上がっただろうが、250ドルくらいで終わったはずだ。エンターテインメント・ディレクターは私に感謝して欲しいくらいだ。それでも今回、あまりに速くオークションが終わってしまったので、ちょっと遅れて来た客たちは間に合わずつまらなそうであった。

このとき、クイーンズ・ルームは空いていた。もしアフタヌーン・ティの直後にオークションをクイーンズ・ルームでしていたら、客にとっても便利だっただろうし集客も楽だっただろう。さらにはほぼ同時に船長のサイン会がデッキ2のブックショップ前であったのも、オークションにマイナスの影響を与えたかもしれない。このあたりの調整も本来はエンターテインメント・ディレクターの仕事ではないのか。どうせオークションの売り上げはチャールズ皇太子のチャリティー基金に寄付されるので、スタッフにとって値段はどうでもいいことなのだろうが、客にとっては参加したイベントが楽しく盛り上がってくれるに越したことはない。

《アフタヌーン・ティ》

クイーンズ・ルームのアフタヌーン・ティには誰でも参加できる。今回のクルーズでは残念ながらティ・ダンスはなかったが、音楽の生演奏はあった。広いので混んでいても、ウェイターが空いた席を見つけてくれ、どこかに座れる。ここだとブリタニアクラスの知人と一緒にお茶を楽しめるし、実はアクセスも、QVやQEの場合はグリル客専用のグリルラウンジよりも、よほどいいのだ。というのもQVとQEでは、グリルまで行けるエレベーターが限られていて、しかもキャビンのカードキーを差し込まないとその階のボタンが押せないのである。それならグリル客以外はそこに近づけないか、というとそうでもない。その一階下から階段で上がれる。階段の前には「グリル客専用」の表示はあるが、それを無視すれば上がって来れ

るのである。ではなんのためのカードキー・システムなのだろう。こちらにそんな手間をかけさせる理由がわからない。またブリタニア客が多く乗るエレベーターで、このカードを差し込むのは気が引けると感じるグリル客も少なくないのだ。



クイーンズ・ルームのアフタヌーン・ティ

グリルラウンジでのアフタヌーン・ティもちろん悪くはない。上階にあるわりには景色が良くないし狭いので、満席になると隣接した眺望の良いプリンセス・グリルに案内される。これもクイーンズ・グリル客にとっては物珍しい。もともと、狭いと隣席の客に話しかけやすいし、グリル客同士だとお互いなんとなく安心感があるようで仲良くなれる。一人で行っても退屈しないというメリットがあるのだ。雑誌も置いてあるので、それをめくりながら、お茶を楽しむのもいい。



グリルラウンジのアフタヌーン・ティ



お茶のメニューと砂時計の置かれたグリルラウンジのアフタヌーン・ティ



さて、グリルラウンジではお茶のメニューが充実していたはずなのだが、この航海の初めの頃には、置いてあるべきお茶のメニューがない。夜に、メートルD'に尋ねると、あるはずとのこと。結局、クルーズの後半になって、メニューが現れた。どこかにしまってあったのを引っ張りだしてきたのであろうが、それならなぜ最初から置いておかなかったのだろう。これによってグリル客は贅沢な気分を味わうことができるのに。(おそらくはメニューに記載されたお茶で品切れのことが多いのだろう。私の好きなジャスミンパールも在庫切れだった。)

このようにキュナードのリピーターにとって、QE クルーズは決して素晴らしい旅ではない。QE 2 のブランド力によって、多くのキュナード・ファンがその誕生を楽しみにし、また QE 2 で働いた乗員が再びかつての仲間と仕事をしたいと待ち焦がれ、キュナード経営者はこれで「アメリカ人からドル、ドイツ人からユーロ、日本人から円、ロシ

ア人からルーブルをいただく」と意気込んでいた船ではあるが、評判は芳しくない。期待していたほどには米人客が乗らないとの話も、今回、乗員から聞いた。ロシア人客には会ったことがない。私としても、ここでさまざまに述べた状況により、キュナードの船の中では QE を最低にランク付けする。

キュナードの醍醐味は、どれほどサービスが低下しようが、QM 2 の大西洋横断だと考えるし、これまでのクルーズでは QV のパナマ運河がもっとも楽しく充実していた。QV と QE とは姉妹船だが、違いはある。最終的にはそれぞれの好みによるのだが、今回フェンシング・クラスで会った若い英国人客は、QE より QV のほうがいいと断言した。これからは QE 2 への憧れを持たない世代も乗船し、冷静に QE を評価するようになるだろう。設備はすぐには改められないだろうから、せめて人的サービスで贅沢を求める客を喜ばせるしか QE 人気を高める方法はあるまい。